
翁な青年の異世界冒険記

亜狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翁な青年の異世界冒険記

【Zコード】

Z5145Z

【作者名】

亜狸

【あらすじ】

97歳でこの世を去った老人が、死後の世界の主に頼まれ異世界へと旅立つ、老人には新たな体があたえられ、異世界ライフをのんびり、ゆっくり冒険していくお話。

作者はド素人で文才もありません。拙い文章でありますのが宜しくお願いします。誤字、脱字多いと思いますので、先に謝つておきます。

細かく修正を行う事が多いので、この場を借りてお詫びしておきます。

1話 旅立ち

近畿地方の南部に位置する片田舎で、一人の男が天寿を全うしようとしていた。

彼の名前は中野 喜三郎、江戸時代から続く、剣術道場の38代目の主であり、世間では『最後の武士』などと呼ばれる程の人物である。

「思えばわしの人生、中々に楽しいものじゃつたのう……道場については、お主に任せるとから、好きにすればいいわい」

喜三郎がそう言つと、彼の孫である孝彦が頷き、

「わかつた、じいちゃん。あつちで婆ちゃんに会つたら宜しく言つといで」

孫がそう答えるのを見ると、喜三郎は嬉しそうに微笑むと静かに息を引き取つた。

多くの門下生と、彼のただ一人の血縁者である孝彦は涙を我慢し、笑顔で『最後の武士』中野喜三郎の旅立ちを見送つた。

「いは、三途の河かの？」

喜三郎は、周囲を観察し、そう呟いた。

周囲には、この世のものとは思えないほど綺麗な花畠が地平線まで続いており、田の前には美しく大きな河があった。

河原には、泣きながら石を積んでいる小さい子供達、河を渡している船の周りに暗い顔をした人々が船に乗る順番待ちをしている。

「まさしく、といった感じじゃの、じゃあ、わしも渡し船に乗らんとのべ。

我が愛しの婆さんがきっと待ってくれてゐるじゃつて」

一人呟く喜三郎。彼は気付いたら、見るからに『あの世』と思われる場所にいたのだったが特に焦つたり驚いたりした様子はない。

「あのー……」

若い女性の声が聞こえ振り返つてみると、そこには神々しい程の美しさの銀髪、銀目で綺麗な花柄の入った和服を着た少女が美しい笑みを浮かべ佇んでいた。

「ふむ、なにかの？」

喜三郎が答えると、銀髪の少女は用件を伝えようと口を開いた。

「中野 喜三郎様ですね？ 我が主が喜三郎様に伝えたい事があるとの事で、一緒に来て頂けませんか？ 私はこの『旅立ちの河』の管理人の花瑠璃と申します。

『旅立ちの河』とは、喜三郎様の国で言つといふの三途の河にあたります」

花瑠璃が用件を伝えると喜三郎はやはり三途の河じゃつたかと、納得した面持ちで返事をした。

「ふむ。此処の管理人の主となると、非常に身分の高い存在ではないのかの？ そのような存在がわしに向のよつなのかの？」

「そうですね、こちらの死後の世界では最も身分の高い方となりま

すね。喜三郎様の生前の輝かしい功績を見込んで、主が直にお伝えしたい事があるとの事なので、ご協力下さいますようお願いします」

「輝かしい功績のつ……

まあ、そのような身分のものに招かれては、行くしかないのう。わしとしては、早く愛する婆さんに会いたいのじゃがの…………」

「『』協力感謝します。それでは私の船で、『』案内いたしますね

花瑠璃は笑顔でそう返すと、少し落ち込んだ顔の老人の手をとり自分の専用の船へと案内した。

1話 旅立ち（後書き）

小説を読んでこくつらじゅうしても書いてみたくなっていました。拙い作品ですが、お付き合って下さると嬉しいです

2話 死後の世界の船といいこその大騒動（前書き）

なぜか謎の空白が出来るのはなんでだろ？・・・

2話 死後の世界の船といじじの島

喜三郎は花瑠璃の船に揺られながら、周りを漂つ他の船に視線を向けていた。

「のう、花瑠璃さん、あれらの船は何処に行へのかのう?」

喜三郎の乗つている船は白いクルーザーのような大きな船で内装も見事なものであるのに対し、喜三郎が視線を向けている船は、真っ黒な小さな船であつた為、疑問に思った喜三郎は花瑠璃に質問をしていた。

「あの黒い船は喜三郎様方で言つ所の地獄へ向かう船になりますね
花瑠璃は穏やかな笑みを浮かべたままそつ告げる、説明を続けた。

「死者は生前の行いによって、行き先が変わるのでですが、船の色は
そういう行き先によって分けられています。『黒』は地獄へ償
いに行き、『青』は転生をする為、『白』は天の国へ昇る為の船に
なります」

「ふむ、ならわしは天国へ行けるのかの? ちと意外じゃのう。

天国に瀕せたもいたり良このいへ……」

「いえ……」の船は由と並びても特別なもので主が直接招待した方しか乗る事は出来ません。

行き先は、主の宮殿に直接つながっております、

「ふむふむ、では瀕せんを探しに行けるのは、まだ先の事になるのかの……」

残念そうな顔をした喜二郎に、花瑠璃は暗い顔をして口を開いた。

「あのう……申し上げにくのですが……」

花瑠璃が何やら申し訳なさやつた顔をしている事に気づいた喜二郎。

「奥様は……その……既に転生されているんですね……」

喜二郎は暫くその言葉を飲み込めず、頭の中でその言葉を繰り返していた。そして、ようやくその言葉の意味に気づいた喜二郎は絶句した。

「なん……じゃと、では婆さんには会えるのか…………ッ！？」

花瑠璃がさりげなく葉を続けよつとした瞬間、喜二郎は周囲にあつた青い船に向かつて跳躍し・・・よつとして花瑠璃に羽交い絞めにされた。

「ええーー・離せー・離せぬかーー・わしづ婆さん所に行へのじやーー・」

「駄目です！あの船へのつたからとて奥様の所へ行けると限つたわけではありませんし、それに奥様は、すでに転生先で結婚されます！」

花瑠璃から告げられた衝撃の事実に絶句する喜二郎

「そんな…………婆さん…………生まれ変わつても一緒になれうつと近づいた仲じゅつたのに…………」

年甲斐もなく涙を流して声にならない声を出しながら嗚咽していく喜二郎。

そんな彼を余所に船は田的方に近づきつあった。しかし花瑠璃は周囲まで暗くさせながら涙を流していく喜二郎に声を掛けれずになったのだった。

2話 死後の世界の船といじじの鳴囁（後書き）

何から何まで初心者な挙句、国語力なかつたのも思い出しました。
不快に感じた方の為この場で先に土下座しておきます。

3話 死後の世界の女性（前書き）

おおお、 いきなり評価して下さっている事に感激いたしましたw
有難うござりますーー！

3話 死後の世界の女王

死後の世界の主である女王の宮殿で、喜三郎と花瑠璃は、宮殿の主を待っていた。

先程まで黒いどんよりとしたオーラを放ちながらブツブツと「ばあさんや・・・ばあさんや・・・」

と、女王を待つように通された部屋の片隅で咳いていた喜三郎も何とか持ち直した様子で、今は落ち着いた表情で、花瑠璃の対面のソファに腰を下ろしている。

「して、花瑠璃さんの主とは、どんな方なのですかな?」

喜三郎は、やや待ちくたびれた、という顔で花瑠璃に問いかけた。

「私の主は上位の神で、この死後の世界を統べる女王『アリア』様」と言つ方で、非常にお優しく、美しい方ですよ」

血らの主を誇らしげな顔で説明をする花瑠璃、すると部屋の扉の方向から少し照れたような声がした。

「花瑠璃、身内をあまり褒めるものではありませんよ

花瑠璃は、エヘヘと照れた笑みを浮かべ、イスから立ち上がり、

扉の方へ立つ人物に、深いお辞儀をし

「申し訳ありません、女王様」

と、二口一笑いながら謝罪した。

喜三郎も、イスから立ち上がり女王と呼ばれた者の方へ向き、お辞儀をする。

「どうも始めまして、私は花瑠璃の上司で、この死後の世界の女王を勤めさせて頂いているアリアと申します。以後お見知りおきを」

高い身分の神が、ただの人間の老人である喜三郎に丁寧な言葉使いで接して来たことに喜三郎は少し驚いた、喜三郎が今まで出会ってきた、高い身分の人間は碌なものでなかつたからである。

「これは、」「丁寧に有難う御座います。

女王殿下、とお呼びすれば、宜しいですかのう?」

「そんなに、改まつた態度でなくて結構ですよ。
気軽にアリア、とでもお呼び下さい」

「ふむ、そうですかの? それではアリア殿、と呼ばせて頂きまし
ょう。

して、アリア殿はこのような老いぼれに何か御用ですかの？

アリア殿、と呼ばれる事に少し満足そうな笑みを浮かべていた女王は、本題を切り出した。

「そうですね、それでは立ち話もなんですので、どうぞお掛け下さい」

そういうと女王は、嘉三郎の正面に腰を降ろした。

すなわち花瑠璃の隣であったのだが、当の花瑠璃は、よほど女王に心酔しているのか、何やら自分の世界に入り、ブツブツと何かを呟いている。

一人の世界に浸っている花瑠璃を見て少し照れたように苦笑いをし、女王は話だした。

「嘉三郎様の暮らしていた世界は、現世と呼ばれています。

そして現世とは複数あり、現世で転生を繰り返した魂は昇華し、天の国へと昇り神となります。

こちらの死後の世界とは、それらを繋ぐ世界となります」

「ふむ、現世が複数あるとな?

それは、わし等のいたような世界が複数あると考えれば宜しいかの？」

喜三郎は特に驚いた様子も見せず、女王に聞き返した。
その様子に女王は少し意外そうな顔をし、喜三郎に話を続けた。

「まさしく、そうなのですが、あの、驚かれないのですか？」

「ふむ？ 人間97年も生きておれば大抵の事にはすぐ馴染めるものじやよ」

喜三郎は女王の質問に対し、ケラケラ笑いながら答え、

「では、話を続けてもらいますかのう？」

「ああ、そうでしたね。話の腰を折り、申し訳ありません。

数多ある現世は、輪廻転生を繰り返し魂を昇華させる場となるのですが、時折その流れから外れてしまう者がいるのですよ。

喜三郎様には、数ある現世の一つへと赴いてもらい、その者達を討つて頂いて、その者らの魂を死後の世界へと送り届けて欲しいのです」

「流れから外れる、とな、そのような人間が存在するのかの？」

「いえ、人間ではありません、確かに元人間であつた者もいるのですが、通常は喜三郎様方で言つ所の 魔物、妖怪などと言つた呼ばれかたをしている者達です」

「ふむ、魔物や妖怪とな？ にわかに信じられん話じやのう、まあ神が存在すると言つのなら、おみのじやうりがのう」

「」理解が早く助かります、かの者らは、通常の方法で生命活動を止めても、魂が死後の世界に向かわず現世に留まり、そしてまた同様の存在として再生するのです」

女王の話を聞いた喜三郎は少し腑に落ちない、という顔で、疑問に思った事をたずねた。

「ふむ、それならば、わしが向かつたとて意味はなくないかの？」

女王は喜三郎の疑問に対し、花瑠璃をチラリとみると、

「花瑠璃、神器を持ってきてもうえますか？」

と、声をかけ、自分の世界に浸っていた花瑠璃は、「ハイ」と返事をすると、名残惜しそうに女王の隣から立ち上がり、部屋から出て何処かへ向かっていった。

女王は花瑠璃が神器を取りに向かうのを確認すると、話を続けた。

「確かに通常の方法で、かの者らを討つたとしても、効果はありませんが、今から花瑠璃が持つてくる神器を使えば、かの者らの魂を死後の世界へと、送り届ける事が可能になります。

送り届けて頂いた魂は、地獄へと向かっていく事となります」

「ふむ、なるほどのう。しかし、わしのような年寄りに務まるかのう？」

それに、わしは婆さんと再会出来ん事がわかり『はーとぶれいく』中なのじやよ・・・

今の状態では、そのような存在に立ち向かえるとは思えんじのう

少し遠い目をし、悲しげな表情で呟く喜三郎に対し、女王は答えた。

「喜三郎様には、この話を受けて頂いた場合、新しい体が用意される事になります。

あと、奥方様に関しては、喜三郎様に赴いて頂く世界に転生しますね。

既に結婚されますが・・・」

驚愕した表情の喜三郎、その表情は驚愕から悲しみ、怒り、黒い笑顔へと変化していった。

そんな表情を見ていた女王は、少し戸惑いながら喜三郎を見てい

た。

（な）に、婆さんが既に結婚していたとして、そんなものは小さな障害じや、愛は奪い取るものじゃからのう・・・相手の男を死後の世界に送つた、としても・・・ふおつふおつふお

喜三郎の黒い考えを理解したのか、女王は少し困ったように、喜三郎に声をかけた。

「必要のない殺生はなるべく控えて下さいね・・・」

喜三郎は女王に思考を読まれた事に、少し驚いたが、それより驚いたのが、「殺生はなるべく」とそれが罪深い事ではないかのように答えた女王に対してだ。

気になつた喜三郎が女王に尋ねてみた所、

「人の世の罪は、人の世の倫理感で処罰してもらつものですから・・・

・
我等神には神の倫理感で罪とみなされる事が、罪となります、た
とえば先ほど、お話した『流れから外れたもの』などですね。
だからと言って嫉妬に狂つた必要のない殺生はしないで下さいよ
?」

喜三郎は内心で「チツ」と舌打ちをすると女王との話が大きく脱

線していた事に気づき、話の流れを元に戻そと、女王に問い合わせる。

「では、新しい体を貰つて、神器とやらを授けられ、わしの暮らし
ていた世界とは別の、婆さんが存在する世界へ行き、妖怪退治をして
欲しい、とゆう事じやの？」

女王は喜三郎の言葉に頷き、先程までの喜三郎の様子は気にしない事にして話を続ける事にした。

「お話を早くて、助かります」

そう女王が返事をした所で、部屋の扉が開き、花瑠璃が、長い包みを抱えて戻ってきた。

4話 神の尖兵（前書き）

3話大幅に追加します。

申し訳ありません。

4話 神の尖兵

長い包みを抱えた花瑠璃は、女王に一礼すると、包みを喜三郎に手渡した。

女王は花瑠璃にお礼を言つと、花瑠璃に隣に座るよう促す。

再び女王の隣に座った花瑠璃は、再び顔を赤らめ幸せそうにしていふ。

「ふむ、拝見して宜しいかの？」

喜三郎が問い合わせると、女王は額を、喜三郎は包みをゆっくり開いていった。

包みの中には、一振りの日本刀があり、喜三郎は興味を示した。

「神器というものが、刀であつたとは興味深いのう・・・
抜いてみても宜しいかの？」

「ええ、かまいません、今回の以来を受けていただいた場合、それは喜三郎様の物になりますし」

喜三郎は、鞘に收められていた刀をゆっくりと抜いた。
鞘から抜き放たれた刀は、その美しい刀身を白く輝かせていた。

「これは、なんとも、凄まじい刀じゃのう・・・
業物というのも憚られる程のものじゃな、しかも、刀身からは溢
れんばかりの清浄な気が纏われておるの」

女王は喜三郎が刀に関心しているのを満足気に見つめて、女王は喜三郎に語りかけた。

「それは数百年前に天の国へと昇られた、村正という方が、天の国の金属で鍛えたもので、
村正様の神氣と、経験、さらに最上級の天の国の金属とが合わさつた、最高レベルの刀剣となります。

そして、その刀は、邪気を払う性質があり、物質だけでなく、魔物や妖怪などの魂を切り裂く事が出来ます」

「なるほどのう、さすがは伝説の名工じゃな。
しかし、伝説級の村正殿の刀を使えるなど、剣術に携わるものとしては光栄の極みじやの」

喜三郎は、さつきまで見惚れていた刀身を鞘に収めると満足気に言葉を発していた。

「では、引き受けて下さるんですか？」

女王は、先ほどの喜三郎の言葉を受け、ホッと安心した様子で喜

二郎に問いかけていた。

「つむ、婆さんがいる世界だしの、それに、このよつた上等な刀を振るつてみたいと思わない方がおかしいわい。それに・・・どうせ断るわけにはイカンのじゃねー。」

女王は喜二郎に「」理解が早くて助かります」と笑みを浮かべ軽く一礼する。

「それで、新しい体とは、どのようなものじやの？」

「そうですね、新しい肉体は、喜二郎様が受け持ちの現世に降り立つた際に、与えられる事になりますので、その時のお楽しみ、と言つ事でよろしいですか？」

「うむ、構わぬよ。

しかし、言語や、生活文化の違いなどは大丈夫なのかのう？
いや、かの地に降り立て、言語が通じぬとなると我が愛しの婆さんに、愛の言葉を呴く事も出来んからのう！」

女王は喜二郎の言葉を苦笑いしながら聞いていた。

「言葉については私が与える祝福で解決出来ますので、大丈夫です。ただし生活文化などの違いについては現地で直に触れて覚えて下さい」

女王の言葉を聞き、ホッと胸をなでおろす喜三郎。
言葉さえ何とかなれば、生活文化の違いなどは、後でどうでもなるか、と軽く考えていた所へ女王は説明を続ける。

「あとは、魔物や妖怪の魂を見る事が出来るようになります。魔物などを通常の方法で生命活動を停止させたら、魂が浮かび上がりますので、その刀で切り裂いて下さいね」

と女王が、説明すると・・・
ふむ、と納得した喜三郎は、手の中にある刀を見つめながら呟いた。

「つむ、じの年になつて、新たに強いものと戦う事が出来るとは嬉しいのう」

その言葉を聞いた女王は、満足そうな面持ちで喜三郎に告げた。

「それでは、喜三郎様を765番田の『神の尖兵』として、今この場を持って任命いたします」

女王がその言葉を囁ひつゝ、喜三郎の体は不思議な光に包まれた。

「これは・・・
体の底から力が溢れてくるよつじゅの・・・」

「喜三郎様の魂に、神の尖兵、と任命をしたので、喜三郎様の魂に
私の祝福が与えられました。
これで、完全に神の尖兵としての役割を請け負った事となります」

喜三郎は女王の祝福を受けた自分の手を開いては閉じたりしながら見つめ「なるほど」のひと女王に答えていた。

「それでは早速、喜三郎様の受け持つ世界へと案内したいのですが、
よろしいですか？」

喜三郎は、

（ふむ、もともと分からん事だらけじゃしのひ。まあ行けば何とかなるじゃね？）
と、深く考えずに女王に『よろしく頼む』と返事をしていた。

5話 新しい名（前書き）

このサイトの利用方法がイマイチつかめず四苦八苦しております。
せめて謎の空白と謎の改行だけでも何とかなればなあ・・・とか考
えています。

さてこの辺に文章におすき合へたださつてこる皆様、誠に有難う
ござります。

不快に感じる点や、誤字、脱字、国語表現などおかしな点などあり
ましたら、お手数ですが、この一報下さりますと、大変ありがとうございます。

5話 新しい名

青い髪で、青い瞳の、黒い衣服に、日本刀を持った青年は森の中で呆けた様子で佇んでいた。

青年は突然の風景の変化に戸惑いつつ、周りを観察していると、一人の銀髪の少女が、青年の近くに倒れている。

「はあ・・・。わしの受け持つ現世に送るにしても、何といふか前振りとかないものなのかのう、それに何故に花瑠璃さんまで一緒になかの？」

そういうと、青い髪の青年は倒れている少女を見て、長いため息を吐いた。

「う・・・ううん・・・・・・！」

銀の神に綺麗な和服を着た少女は目を覚まし、見慣れない森の中を見渡してから・・・

絶叫した。

「ええええええ！？ なんで私が現世へいるんですか！？
ハッ！？ 女王様、女王様は何処に！？」

何の説明もなく、現世へと飛ばされた花瑠璃は、半分パニックに陥りながら、女王の名を繰り返し叫んでいた。

そんな様子を見た青年も、いきなり気づいたら現世だった為、花瑠璃に掛ける言葉が見つからない様子である。

「ハハハ、ヒック・・・ 女王様あ・・・」

ついに泣き出しちしまった花瑠璃、先ほどまで青年が見ていた様子でも、花瑠璃の女王への心酔ぶりは伺え知れたので、青年は、さて、どうしたものかのぉ？ と心の中で思案するのであった。

「とりあえず、アリア殿に連絡を取ることは出来ないのかの？」

と、青年は現在泣きじゃくっている少女、花瑠璃に声を掛けた。

「貴方誰ですか！？ 私をどうするつもりなんですか！？ なんで女王の名前を知ってるんですか！？」

警戒心むき出しで、怒ったように青年に敵意むき出しの花瑠璃。そんな花瑠璃の対応に、困った様子の青年。

「…………（お王、なかなか面倒くさい女子じやの、）」

青年は聞こえないほどの小さな声で呟いたのだが、花瑠璃には聞こえたりして、怒った顔で青年を見上げていた。

「わしじや、喜二郎じや、お王と共に女王と話をしてもうたジトイ
じやよ」

花瑠璃は少し考える素振りを見せると・・・

「あああ、喜二郎様――！　喜二郎様がどうして現世に――？」

先ほど喜二郎と並んで乗った青年は、驚いた表情をしている花瑠璃の顔を、更に面白くそうな顔で先程までの女王との会談の様子を告げた。

「…………お王、聞いておらなんだのか？」

「…………。」

沈黙で返事をする花瑠璃。

「ハア、図星じゃつたか……。
しかし、何故女王は、わしだけではなく、お主まで現世に遣わし
たのかの？」

ややバツが悪そうに花瑠璃は、小さな声で返事をした。

「それは、おそらく、この場所は、私が神の末席に加わる前に過ご
していた現世の場所だからです」

沈んだ表情で、返事で答える花瑠璃に、喜三郎は納得した様子で
ある。

「なるほど、お主がわしの『神の尖兵』としての案内人と言つ事か・
・・」

嫌そうに頷く花瑠璃、彼女は女王の意思は組めても納得はしてい
ないのだろう。

すると、花瑠璃の懐から、美しい声がした。

『相変わらず、『J理解が早くて助かります、喜三郎様

それと花瑠璃、あまり喜三郎様を困らせては、いけませんよ』

花瑠璃は、急いで懐を探ると、そこには手の平程の大きさの手鏡があり、花瑠璃は、その手鏡を大事そうに懐から取り出した。声の主はこの手鏡であるらしい事を悟った喜三郎と、花瑠璃は、声の主に問いかけた。

「ふむ、アリア殿、せめてこうつ・・・・、もう少し前振りとか合つても良かつたんじゃないかなう?」

流石にわしでも混乱するんじゃが・・・・?

あと、先程の理解が早くて助かる、と言つのは、花瑠璃さんが、わしのこの現世での案内人と言つ事で合つていいのかの? ちと見ていて可愛そうなのじゃが?」

「女王様ひどいですう~! セめて何かしらの説明があつても良いじゃないですか~!」

『ええ、喜三郎様、花瑠璃がこちらの世界を案内してくれます。あと突然転送してしまった無礼をお許し下さい。

それと花瑠璃、事前に説明したら貴女断つていたでしょ? 喜三郎様に、案内人が必要だつたのよ。

大丈夫、喜三郎様が、この世界にある程度慣れたら、帰ってきてもいいから』

「本当にですか…！ 約束ですよ女王様…！」

女王の言葉に、希望を見つけ出したのか、花瑠璃は明るい笑顔で答えていた。

結構ひどい事されると単純な娘じゃの、と、喜三郎は呆気にもうけながら花瑠璃を観察していた。

『それと、最後になりますが、喜三郎様、そちらの現世での『名前』を授けようと思こます。

その世界での名前とは、そちらの世界に存在してしている証となりますので、お受けにならなかつた場合、2・3日で魂ごと消滅する恐れがありますので、何卒お受けになつて下せこますか？』

せりりと呟くことを言つてゐる女王。

「つむ、せつかく新しい命と身体を授かつたのじや、新たな名前をつけてくれると書つなら歓迎するぞー」

『それでは…・・・

汝、神の尖兵に、死後の世界の女王アリアが、新たなる旅立ちを祝して、名を授けます。

汝の名は「シグルス」

シグルスの進む道に幸福が舞い降りるよつ、祈りを捧げます』

シグルスと呼ばれた青年は、声の主に対し、新たな名前を受け入れると、女王に感謝の意を述べた。

「つむ、新たなる門出に、アリア殿のよつな高貴な方に名を授けて頂き有難き幸せですじや。この名に恥じぬよう、アリア殿から賜つた任務を必ずや達成してみせましょつべ」

「あのう、女王様？ 私は？」

とやや不満げに恐る恐る聞く花瑠璃。

『あり貴女、その世界での名前あるじやない』

花瑠璃の意見は軽く一蹴され、花瑠璃は複雑な表情をしている。

『ではね、花瑠璃、いえもう「ルミア」と呼んだ方が良いかしら？もうあまり通信できる時間が残っていないので、そろそろ失礼します。

これから暫くは連絡を取る手段がないので、シグルス様、ルミア、二人で頑張つて下さいね』

そう言つと、先程まで女王の声がしていた鏡は割れてしまい、ルミアと呼ばれた少女は、何とも言えない複雑な顔をしていた。

一方、シグルスと呼ばれた青年は、これから始まるであろう冒険と、愛する婆さん探しの旅に胸を膨らませていた。

5話 新しい名（後書き）

感想頂けたりしたら嬉しいです。

6話 風の前の静寂（前書き）

申し訳ありません。

5話までの話を呼んでいたら、かなり違和感があり、もともと決めていた設定に、その場の思いつきで話を付け加えてしまつた為だと判断し、5話田までを、一部、修正しています。

大筋の話の内容は、変更していないものの、結構な数の修正を入れています。

自分なりに、変な違和感は少し薄らいだかな、と思っていますが、一度掲載した本文を弄くり回してしまい本当に申し訳ありません。

6話 嵐の前の静寂

シグ尔斯は女王との通信が終わり、複雑な表情をしているルミアにこの付近の事をたずねていた。

周囲は木々で囲まれ、田舎と呼ばれていたシグ尔斯の日本の故郷ですら見たこともないような太い木々、そして木々の葉や、近くの植物なども見たこともないような物ばかりだ。

森の奥から聞こえてくる動物の声も、シグ尔斯には聞いた事もないようなものばかりである。

しかも、外気は少し肌寒く、夜になると更に冷え込む事も予想が出来た。

(これは確かに花瑠璃さんの案内がいるの、少しばかり別の世界に行くとゆう事を軽く見てしまつてたようだ。)

花瑠璃さんには気の毒じやが、女王に感謝せねばイカンの)

シグ尔斯に先程質問されたルミアは、周りを見渡しながら答える。

「こには・・・

ルルの森と呼ばれている場所の、丁度、中心のあたりだと思います。

ソコに生えている植物は、ルルの森の深い所にしか生えない香草の一種なので、おそらく間違いありません

そう答えると、ルミニアは暗い表情でシグルスに現在の状況を告げた。

「ここは危険な動物は出ず、食用の植物や木の実などは豊富にあります。

ただ、その為か野盗が良く出ることで有名なのです。

しかも現在の太陽の位置から察するに、もつあと1時間ほどで日も沈みますね。

ちなみに、この世界の一 日は25時間単位で1日となり、380日で1年となります。

そして、この世界にもシグルス様の故郷のあった国の『四季』というものがあります。

現在の季節はシグルス様の故郷で言つところの『秋』といった所ですね。

この地方は夜になつたら、かなり冷え込むと思われます。

正直、あまり良い状況とは言えないですね」

シグルスは暗い顔で語つているルミニア対し、真剣な面持ちで自らの意見を述べた。

「日が沈むまで残り1時間しか無いのであれば人里を日指すのは無理そうじゃの。

野宿しか選択肢はなさそうじゃの。

夜にかなに冷えるのであれば、焚き火は焚かないわけには行かなさそうじゃしのう。

しかし、焚き木を焚けば野盗に気づかれる恐れがある、と言つた所かのう。

そうなつてくると、見張りと睡眠を交互に大体2時間交代くらいで行わねばならぬかのう。

あと、田没が近いのなら食べ物は今夜は諦めた方がよさそうじやの・・・

シグルスの意見を聞いた、ルミアは頷き。

「私も、それが最善だと思います。

明日、日が昇り次第、人里を田指して歩くのが良いかと思います」

シグルスは頷きながらも、少し心配した様子でルミアに問いかける。

「うむ、しかし、花瑠・・・ゴホン！
ルミアさんが、その格好で歩き回れるのかが、ちと心配じゃのう。
・」

ルミアと呼ばれた事に、少し複雑な表情をしたルミアであったが、直ぐに表情を戻し、シグルスの言葉に、答えていた。

「そうですねえ、この格好だと少しキツイかもしれませんね・・・まあ明日頑張って人里についたら、動き易い服を調達することに

します。

体力には自身がありますので、まあ、なんとかなるでしょう・・・
と言つよつ、何とかしなきやあならないですしね。

おそらく女王様が、死後の世界と同じ姿の身体と、衣服を『えて
くれたんでしょうが・・・。
この状況ですとマイナスにしかなりませんね』

問い合わせられたルミアの服装は、綺麗な花の柄の入った和服で、
足元はポックリである。

長時間の歩行に向かないのは明らかだ。

そうして一通り必要な事を話終えた二人は、日が沈むまで、あと
少ししか時間が無いこともあり薪を探しに行つた。

薪を集めて積み重ねた所でシグ尔斯は火をおこす為の道具を持つ
ていない事に気づいた。

その旨をルミアに伝えると、ルミアはクスリと笑つと「大丈夫で
すよ」と答えていたので彼女が偶々その手の道具を持っていたのだ
ろうと、シグ尔斯はホツとしていた。

ルミアは、集めて来た薪に手をかざすと目を閉じて何かを呴ぐと、
次の瞬間ルミアの手から炎が飛び出し、焚き木に燃え移つたのであ
る。

「「つやあ、驚いたの」」

先程ルミアが引き起こした現象を、興味深そうに観察していたシグルス。

「ふむ、体内の『氣』を、そのように使う事が出来るとはのう・・・

」

先程のルミアの体内を巡る『氣』の流れを感じていたシグルスは、関心した様子で燃えている焚き木を見つめていた。

「普通もつと、驚くと思つんですけどね・・・」

ルミアは始めて見る現象にも、あまり動じていないシグルスに逆に驚かされた様子である。

「先程は説明を忘れていましたが、こちらの現世では魔力、シグルス様が言つところの『氣』を、一定の手順で体内を巡らす事により『魔法』とゆづ現象を引き起こす力が存在することが認知されています」

「ふむ・・・

わしり、武の道に通じる者が呼吸によつて丹田で『氣』を練るのを複雑にした感じかの？

まあ、もつとも最近では明確に『氣』を感じ取る事が出来るものはおらんがの」

ルミアは「流石ですね」と苦笑いをすると、シグルスの考察がほぼ正しいものである事を伝えると、自らが熾した焚き木の前に座り、シグルスも座るよう促した。

「まあ、今日は色々な事がありましたが・・・。
これから暫くの間、宜しくお願ひしますね。『シグルス』様」

「つむ、じがいわす宜しく頼む『ルミア』さん」

シグルスに、ルミアと呼ばれた少女はまた少し複雑な表情をしながら、答えていた。

「実は、その名前の時の自分には、あまり良い思い出がないんですね・・・。
まあ、もう過去の事だから良いんですけど・・・。
女王様がつけて下さった『花瑠璃』という名を呼んで貰った所で、こちらの現世ではあまりにも変わった名前ですから仕方ないですしね・・・。

ああ、あと私の事は呼び捨てで呼んで下さいね、『シグルス』様

「つむ、ではこれから宜しくの、『ルミア』」

改めて、挨拶を交わした二人は、お互にクスリと笑うと、立ち上がり、握手を交わした。

その後、二人で焚き木を囲み、他愛のない話などを重ねて行く内に、夜は更けていった。

1回目の睡眠を終え、シグルスは2回目の見張りを行つていた。

本当は、一人で寝ずの番をしても良かつたのだが、おそらくそれを善しとルミアは言わないだろうと思い、交代制で睡眠をとる事を提案したのだ。

火に薪をくべながら周囲を警戒しているシグルスの隣では、とても可愛らしい寝顔で少女が寝息を立てている。

この、神の末席に席を置くという少女は、1回目の見張りの当番を終えると深い眠りについており、シグルスは、まだ少し幼さの残る少女の可愛らしい寝顔を優しい表情で見守つっていた。

ふと、何かに気づいたシグルスは、田線のみで周囲を確認している。

その眼光は、先程まで少女に向けていた優しいものではなく、まるで別人ではないかと思わせる程に、冷たく、まるで研ぎ澄まされた刃のような鋭さだった。

(気配は4つか・・・)

シグルスは忍び寄る気配に警戒をしつつ、決して自分が気づいている事は悟られないよう気を配る。

シグルスとルミアがいる森は静寂に包まれていた・・・
まるで、『嵐』を警戒するかのように・

6 話 氷の前の説教（後書き）

すこません、一部の言葉の訂正を修正します。
あと「臍下中田」を、「胚下中田」と何を間違ったらいつなるのか
分からぬいよつな間違いをしていました。

7話 狂氣（前編）（前書き）

え～と、今回、次回と、かなり残酷な描写、性的な描写が2話に渡り展開されます。

それらが苦手な方は、戻るボタンを押して下さいね。

あと今回でる用語の説明しちゃいます。

栗型：刀の鞘の上部のあたりの事だそうです。

柄頭：刀の持ち手の部分の先っちょの方だそうです。

小尻：鞘の先っちょの部分のことだそうです。

人中：鼻と口の間にある人体の急所です、殴られたら痛いそうです。

鳥兎：目と目の間の人体の急所です、どうかいたら痛いそうです。
霞
　　：テンプルのことらしいです、叩かれたら痛いそうです。

7話 狂氣（前編）

月の明かりも届かない深い森の中。

この4人の男達は、この森の周辺に出没する『野盗』の一昧の下端で、先刻、野盗の頭領に命じられ、アジトである洞窟の周囲の警戒をしていた。

彼等の頭領や先輩達は今日の獲物から奪つた『もの』で、『宴』を『お楽しみ』中のなのだろう。

4人の野盗の下端の男達は、おそらく今晚も『おこぼれ』には預かれないのだろうと、やる気もなさ氣に周囲を見渡していたのだが、そこでシグルス達の焚き木の光を見つけたのである。

野盗の下端達は、この「野盗が出没する森」は、誰もが野盗を警戒し、野盗達に居場所がバレないよう、焚き木などせず息を潜めて夜を過ごす事を知っていたのだ。

「おい見ろよ？　どいつも馬鹿が俺達に襲われたいらしいぜ？
あんな田立つ所で焚き木なんてやつてらあ。　きっと世間知らずの阿呆がいるんだな」

男達の一人が、楽しそうに声を出し、下端仲間に知らせていた。

「おー！　本当だ。　いつやあきっと良いカモじやねえか？」

「頭領に知らせに行つてくるか？」

「バア～力、こんな所で焚き木する奴なんぞ、ぜつてえに大したこ
とない奴に決まつてんじやねえか！」

軽く、焚き木している奴をぶつ殺して、俺達4人で戦利品を山分
けしようぜ？」

もちろん、頭領には内緒でな。 と付け加えると、男は下卑た笑
いを浮かべていた。

残り3人は、その言葉を受け入れ、焚き木をしている、愚かな獲
物を自分達だけで襲おうと、シグルス達の居る焚き木の方へ歩を進
めていった。

彼等は焚き木の近くまで行くと、獲物に気づかれないよう、物音
を立てずに獲物に近づき、木々の隙間から様子を伺つた。

（うつひよ～、女がいるぜ！！ 守つてんのは、あそこの弱そうな

兄ちゃんだけだ！！

女は変な服着てるが、かなりの上玉だぜ）

（最高じゃねエか！ どうせ服なんて？ぎ取つちまつんだしな！）

（へへへ、頭領達の『お楽しみ』に参加できなかつたのが、かえつ
てラッキーだつたな！）

（おお、あの今日攫つた娘より全然いいじゃねえか）

(やべ、鼻血出そう、うひひ)

男達は下品な笑みを浮かべ、小声で話し合っていた。

一方、野盗の気配に感づいているシグルスは、男達の下世話な話に少々ライラしながら耳を傾けていた。

（あの者らは、会話から察するに、野盗達の使い走りじゃの・・・、大方、わしらの焚き木の光を見つけて、自分達のボスに内緒でここまで来たのじやろう。組織だった偵察や襲撃ではないのなら、今ここで奴等を片付けても大丈夫であろう。

これ以上奴等の、汚い目線をルミアに向けられるのは不快じやし、何より気になる事も言つておる）

男達の様子を探つていたシグルスは、行動を開始した。

シグルスは村正を左手に携え一瞬の内に男達の正面へと近づくと、村正の栗型をしっかりと左手で握り、下品な話をしていた男の「人中」へと村正の柄頭を突き出し、男の意識を刈り取つていた。

意識を刈り取られた男が倒れる前に、栗型を握つていた左手の少し下に右手を添えて、栗型を握つている左手を支点に右手を振りぬき、鞘の小尻のあたりで側にいた男の「霞」に打撃をあたえると、そのまま鞘の腹の辺りを握つていた右手を引き、栗型を握つていた左手を少し突き出して更にもう一人の男の「鳥兎」に、柄頭を叩き込んだ。

3人の男達は自分が何をされたのかも分からず、3人同時に崩れるように倒れた。

痛みすら感じる暇もなかつたらしく、その顔にはまだ下品な笑みが浮かんだままだ。

残つた一人の男は狼狽しながら、意味がわからないといった表情で、先程倒れた3人の側に立つシグルスを見ていた。彼にはシグルスが何をしたのかすら視認する事が出来なかつたからだ。

「おいお主ー！」

お主には聞きたい事があつたから、残してやつたのじや！ わしの質問に答えよー！」

「なつー！ テメエ、俺の連れに何しやがつたんだー！？」

シグルスは男の問いかけを無視し、先程の男達の会話の中に氣になる言葉があつたので、それを確認する為に声をかけた。

「先程のお主らの会話の中で、『攫つた』だの『お楽しみ』だの言葉があつた筈じゃー！」

「誰かが囚われてあるのかーー！」

「ああん、なこと知つてどうするつてんだあ？ へつ、今頃は頭領達がお楽しみだらうや、あの娘もテメエの連れには余るものの中々の上玉だつたからなア」。

今頃は、精神がぶつ壊れて腰でも振り続けてんじゃねえかあ？」

「・・・攫つたのか？」

シグルスは、胸の奥底から湧き出る怒りを抑え低い声で問いかけた。

「へへ、今日の夕方に馬鹿な親子が、近くの街道に護衛もつけづに通つてた所を襲つてやつたのさ。

シグルスは、男が最後まで喋る前に、村正を抜刀し、男の耳を切り落とした。

「案内してもらおつか・・・
あと、^{おれ}凸の前で、ふざけた口は慎め」

「うう、イテヒ、いてえよお・・・
わかった、わかったから命だけは助けてくれよう・・・」

男はシグルスに切り落とされた耳のあつた場所を押さえ、涙を流

しながら、シグルスをアジトまで案内するかわりに、命だけは助けて欲しいと嘆願している。

シグルスは、命乞いをする男を冷ややかな目で一瞥すると、誰かも知らぬ少女の無事を祈っている。

ふと、ルミアの事が気になり、そちらにシグルスが目を向けると、怯えた顔のルミアがシグルスを見つめていた。

怯えた少女の顔を見て、シグルスは少し冷静さを取り戻したようで、先程、男を脅していた時のような口調ではなく、普段の口調でルミアに声を掛けた。

「今から、わしは少し出かけてくる。

申し訳ないがルミア。、お主は此処で待っていてくれんか？」

「・・・私も一緒に行きます」

「先程の話を聞いておつたのじゃね？、駄目じゃ、危険だし、それに・・・」

「シグルス様の・・・、おっしゃりたい事は理解できます。
けれど私は『普通』の女ではないので、大丈夫です」

ルミアは、まだ少し震えているものの、凛とした瞳でシグルスを見つめている。

シグルスは、そんなルミアの様子を見て、渋々と同行を認めた。本当は連れて行きたくなかったのだが、野盗に攫われた少女の事を考えると、今は一刻も時間が惜しい為、ルミアと押し問答している暇はない。

シグルスは目の前でガタガタと震えている男を無理矢理立たせ、道案内をさせた。

7話 狂氣（前編）（後書き）

戦闘の描写とは難しいものですね・・・

8話 狂氣（後編）（前書き）

前回に引き続き、残酷な描写、及び性的な描写が本編中に含まれています。

そういうものが苦手な方は戻るボタンを押して下さいね。

また、今回のお話を見て下さった方で、極度の不快感など感じられた方がおりましたら感想の方にご連絡下さい。

そういうたゞ意見が多かつた場合、7・8話の本編を別のものに差し替えます。

8話 狂氣（後編）

野盗達のアジトである洞窟内で、少女は引き千切られた衣服の切れ端のみを身体に纏つた状態で横たわっていた。

少女の身体には無数の擦り傷や痣が男達によつてつけられている。少女は痛みと恐怖で喉が裂けてしまう程泣き叫んだのだろう、少女が小さく呼吸をする度にヒューヒューと音が聞こえている。

田の前で両親を殺された挙げ句に男達の慰みものとされ、執拗に蹂躪され続けた少女の心は憐れにも壊れてしまっていた。

涙の跡を残した顔には、もはや何の感情も浮かんでおらず、彼女は「お母さん、お母さん……」と、まるで壊れたスピーカーのように囁いていた。

男達のリーダーは、そんな彼女を引きずり立たすと、彼女を洞窟内の手ごろな岩に縄で括りつけると仲間達に呼びかけた。

「おいオメエラ、コイツはもう壊れちまつて売れないさうだし、ちつとした催しものでもするかあ？」

優勝者には今日の戦利品から金貨3枚出してやろう。

「ひゃっほう！ セツスガボス！ 太っ腹！ ！」

「よーし、そんじやあ俺からいくぜーーー！」

そんな男達の言葉にもまったく反応を見せない少女。

男達は残虐極まりない「遊び」を始めた。まるでダーツでも樂しむように、少女の体には何本ものナイフが突き刺さつていった。少女はナイフが突き刺さる度、小さく「うつ」と唸つていたが、その瞳には何の感情も浮かんでいなかつた。

シグルスとルミアは、野盗の下つ端の男の後ろについて彼等のアジトへと向かつて歩を進めていた。

野盗達のアジトはシグルスとルミアが焚き木を行つていた所から役1km程の所にあり、先ほど居た場所から大して時間をかける事もなく到着することが出来た。

野盗達のアジトは周囲を森の木々で隠すように覆われた場所にあり、まさしく天然の隠れ家、といった風体である。

道案内がいなければ辿りつく事も出来なかつただろづ。

洞窟の入り口が見渡せる場所まで到着すると、シグルスは険しい表情で洞窟の入り口を見つめ、焦つた表情で、声を発した。

「血の匂いがする…！ 急ぐぞ…！」

そう怒鳴つたシグルスは、此処までの案内を勤めた野盗の下つ端に逃げられないように殴つて氣絶をすと、洞窟へと走り出した。

突然走り出したシグルスの後をルミアも追つ。

すると、洞窟の入り口から少し入つた所でシグルスは呆然と立ち止まつっていた。

「くッ！ コレは…・・何という酷い事をつ…！」

「れでは・・・まるで『あの時』の再現ではないかッ…！」

ルミアは彼の身体に遮られて、洞窟の中を見ることが出来ない。ただ、シグルスが先程とは比べ物にならないほど怒つている事だけは背中越しでもハッキリとわかる。

それほどまでに強い怒氣がシグルスを包み込み、彼の肩は怒りの感情によつて震えていたからだ。

ルニアは、シグルスの「あの時」とゆう言葉に嫌な予感を感じながら、彼が何を見てしまったのか確認するために中を覗くとシグルスの右後方から身を乗り出した。

ルミアが洞窟の中を見ようとしている事を察知したシグルスは「見てはならん！！」と叫んだのだが既に遅かった。ルミアは洞窟の中の凄惨な光景を見て固まっている。

ルミアが目にしたのは、無数のナイフが体中に突き刺さった全裸の少女だった……。

少女は既に絶命しており、その瞳には何も映していない。

異常なまでの怒氣を放つていたシグルスは村正を抜刀すると、既に絶命している少女に、まだ飽き足らぬといった表情でナイフを投げつけようとしている男達の方へと向かい駆け出していた。

シグルスが駆ける姿はまるで閃光のようで、光が瞬いたと思つた瞬間には野盗の男達の手や足などが散つていいく。

シケルズは男達の命を『また』奪わぬよう注意しながら、男達の動きを封じる為に次々と男達の体の一部を落としていったのだ。突如光が走ったかと思うと、自分や仲間達の手足が吹っ飛んでいく。そんな様子を見ていた野盗達は恐怖におののいた。

「いてええつえ！　いてえええよおおおーー！」

男達の悲痛な叫びが洞窟内にこだまする。

シグルスは男達全員の体の一部を切断することによって男達の動きを完全に封じた後、男達に怒氣を孕んだ声で問い合わせた。

「この少女をこのよくな田に呑ませたのは何故だつー？
首謀者は誰だつー？」

男達には突如目の前にシグルスが現れたように見えた、突如目の前に現れた男の顔は怒りで悪鬼の如く歪んでおり、その手には血が滴る刀を携えていた。

そんなシグルスを田撃してしまった野党の男達の顔は、言い様のない恐怖と痛みで引き攣っている。

男達は一斉に自分達のボスの方へと田線を送る。

視線の先には、両足の足首から先がなくなり、恐怖に引きつった顔の男が居た。

先程まで、少女に非道な行いを指示していた人物である。

「貴様が、首謀者か？　楽に死ねるなどと思うなよ？
死んだほうが遙かにマシだと思える苦しみを『えいやらつ』

シグルスはそう言つと、男の肩に村正を突き立てる。シグルスは、自身の顔を怒りと憎しみで醜く歪ませ、いびつな笑みを浮かべて男に刺した刀に強く力を込めている。

ルミアは、そんな彼の様子を怯えた表情で見守っている。 彼女は、事の成り行きをただ見守ることしか出来ずにいたのである。

た、助けてくれ！！ おおお俺がアンタに何したっていうんだ！

金ならある、さ、金賃50枚で、どぞ、どうだ？

だから見逃してはくれよおおお」

野盗達のリーダーは情けなくも失禁しながら何とか命乞いをしていた。
シグルスは、そんな彼を侮蔑を込めた目で睨むと言葉を続けたのである。

「何をしただ？ わからんのか？ だったらあの少女はお前に何をしたと嘆つのだ？」

シグルスはそう言うと今度は、目の前で命乞いをしている男の股間に村雨を突き立てた。

お、お願ひします！ 許して下さい……！ な、なんでも
しますからあ……！」

男達のリーダーは、涙と小便を流しながらシグルスに命乞いをしている。

涙を流して命乞いをしている男の部下達は、シグルスの行つてい
る事を、恐怖に震えながら見守っていた。

「そここの少女も、お前等にそうやつてお願いしたのではないか？
それをお前等はどうしたんだ？」

そう言つと男に突き立てていた村正をグリグリと捻るシグルス。
あまりの恐怖と痛みに、野盗のリーダーは白目を向いて泡を吹き
ながら氣絶した。

「氣を失つたか……、後が聞つかえている事だし、止めを刺してやろ
う」

シグルスは身体に赤黒い『氣』を纏わらせ村正を高く構えると、
その刃を振り下ろそうと村正を握る手に力を込めた。

先程から動くことが出来出来ずにいたルミアは「ハツ」と我に返
つた。

野盗のリーダーに止めを刺そつとしているシグルスの体が赤黒い
『魔力』に覆われていたからだ。

ルミアは震える自分の足を叩くと、シグ尔斯と野盗のリーダーの間に飛び込んだ。

シグ尔斯は目の前の男に止めを刺そつと、振りおろしかけた手を止めた。

自分の前に銀髪に銀目、白地に綺麗な花柄の入った和服を着ている見知った少女が両手を広げて立ちふさがつたからである。

少女は、恐怖に震える心を必死に押さえつけながらシグ尔斯に語りかけた。

「なりません！ 喜三郎様！ 憎しみに囚われて『狂氣』に身を任せてしまません！！」

「どけ！ ルミア！ 邪魔だ！」

目の前で自分の行いを邪魔しようとする少女に、シグ尔斯は怒気を込めて答えていた。

少女は目の前で赤黒い『魔力』を纏っているシグ尔斯に一瞬怯んだが、それでも言葉を続ける。

「退きません！！ どうして私との間の壁を壊すのですか…」

ルミアは必死に言葉を紡ぐ。

そんな彼女に苛立つた様子のシグ尔斯はルミアを睨みつけようと声

を張り上げ怒鳴るよつて言葉を発した。

「くっ！ なぜだっ！？ なぜこのよつな男達を庇う！？
これでは、これではあの少女が慘め過ぎるではないかっ！？」

「別にその男を庇っている訳ではありません！」

シグルト様の『娘様』の事件も存じておりますので、強くお怒り
している理由もわかります！！

ですが！ ですが！ シグルス様を『狂氣』にとりつかせる訳
には行かないのです！！

70年前の『自身にお戻りになられる氣ですか！？ 奥方様に闇
より救われた魂を、また再び闇に落としてしまつおつもりですか！
？』

そこまでルミアが語ったところで、シグルスは我に返った。

徐々に冷静を取り戻すシグルス。 その体に纏わりついていた
赤黒い『氣』は、シグルスの体から抜けて行つた。

「すまん・・・。 あの少女が『美奈子』に重なつて見えて我を忘
れておつた・・・。

それに、婆さんとの約束を忘れてしまつ所だった、感謝する・・・

「

「いえ、私だつて彼等の行いには、正直憤つておりました。 殺し
てしまつた方が良いとも思つていましたし・・・。

しかし、我等「神に属する者」は、『狂氣』に取り憑かれる訳には参りませんので、悔しい気持ちはあります、が、此処は、この国の方に任せることいたしましょう』

「そりゃ、じゃの、しかし、彼等は放つておいても死ぬのでは、ないか？」

即致命傷の場所は避けたが、このままだは「法」に任せると前に失血死、するんではない、かの？」

シグルスは、未だ口調を切り替える事が出来ていないのか、変にどもりながら話をしている。

「それは、私が解決いたしました」

『凍れ……』

「…………やあああああああああああああああああああああ」

ルミアが短くそう言つて手を振りかざすと、男達の失った手や足といった場所が凍りついた。

男達は、また恐れ慄くと、叫び声を上げた後、洩らす事なく全員氣絶してしまったのであった。

「それはやうと・・・、この少女の身体をを綺麗にして、埋葬してやりたいのじゃが・・・

手伝ってくれる、かの？」

シグルスは手に握っていた村正を血払いし、鞘に収めながらルニアに声を掛ける。

ルミアは頷くと、シグルスの方へと歩み寄つていった。

8話 狂氣（後編）（後書き）

今回のお話を見て下さった方、感想など頂けましたら嬉しいです。
「ひい」と表現は不快であると言つた、「意見が多くかった場合」、7、
8話は差し替えますので。

12月23日、一部の言葉の言い回しや、言葉使い、あと説明不足だったところを修正しています。

12月25日、再び一部の表現を変えさせて頂いております。

9話 輪廻転生の流れから外れた者（前書き）

え～と、私の拙い作品を読んで下さっている皆様、まじとに有難う御座います。

8話の本編をまた大きく修正してしまっております。修正多くてすいません。

あと野盗といひつて葉が『野党』になっていた事にも気づき、修正します。

馬鹿な作者で申し訳ありません！ 森の中に野党、すなわち議員さん達がいたらビックリしますよね～・・・。

9話 輪廻転生の流れから外れた者

シグルスとルミアは、野盗達に殺されてしまった哀れな少女を、せめて綺麗な姿で「死後の世界」へ送り出してやろうと思い、未だ岩に括り付けられているままの少女へと近づいていったのだつた。

無数のナイフが突き刺さつている少女の近くへと歩を進めたシグルスは、その身体に巻きついていた縄を解くと少女を優しく抱きかかえ、野盗達が使つていたであろう莫薙を引いただけの寝床へと彼女を寝かした。

シグルスは少女に刺さつっていたナイフを全て抜くと、彼女の体を拭く為のものがないか探してきて欲しいとルミアに声をかけていた。ルミアは頷くと付近にあつた空の桶を拾い上げ、魔法で水を溜めると自身の懷からハンカチを出し、水に浸した。

「少し冷たいけど、我慢してね」

ルミアは既に息絶えた少女に声を掛けると、彼女の身体を拭こうとしたのだったのだが、そこで少女の身体に異変が起こつたのである。

既に息絶えていた少女の体が淡い光に包まれたかと思うと、少女の体の中から魂が抜け出してきたのだ。少女の魂は、俯いたまま何かを呟いている。

「・・・たい、・・・い、・・・さん、・・・ん」

消え入りそうな声で咳く少女の魂。シグルスはそんな彼女の魂に優しく声を掛けた。

「もう大丈夫じゃよ、怖いものはおらんからの・・・」

少女はまだ下を向いたまま咳いている、しかし今度の声はシグルスにも聞きとる事が出来たのだ。

「痛い怖い痛いお母さん助けてお父さん助けてお願ひしますもうしないで嫌だもう死にたい死なせて下さいお願ひします痛い怖い痛いお母さん痛い怖い痛いお母さん助けてお父さん助けてお願ひしますもうしないで嫌だもう死にたい死なせて下さいお願ひします痛いお母さん痛い怖い痛いお母さん助けてお父さん助けてお願ひしますもうしないで嫌だもう死にたい死なせて下さいお願ひします痛い怖い痛いお母さん痛い怖い痛いお母さん助けてお父さん助けてお願ひします」

シグルスは少女の言葉に胸を締め付けられるような思いでただ佇み、ルミアは目に涙を浮かべながら顔を伏せている。

シグルスとルミアは錯乱状態の魂に掛ける言葉を見つける事が出来ず、ただただ少女の魂の咳きを聞く事しか出来なかつた。

暫くすると、少女の魂に変化が現れ、少女の魂から『紅い魔力』

が発生し、彼女の周囲を竜巻のように纏わりつき始めたのだ。

その様子に一早く気づいたルミアは、慌てた様子でシグルスに声を掛けよひと叫ぶ。

「シグルス様、彼女から離れて！」

竜巻のように回転する魔力は、少女の魂とその体を飲み込みながら少しづつ色を変えていく。いる。

最初は赤よりも赤い紅だつた魔力は、現在は限りなく黒に近い赤色をしていた。

ルミアの叫び声を聞いたシグルスは後方に下がろうとしたのだが間に合わず、シグルスは少女の魂の周りに渦巻いている『気』について、はるか後方に吹き飛ばされてしまい、洞窟の中で隆起している岩に背中をぶつけたのである。背中を強かにぶつけたシグルスは血反吐を吐きながら立ち上がり、村正を杖がわりに痛む体を無理矢理起こそうとしている。

ルミアは吹き飛ばされたシグルスに駆け寄り、シグルスに肩を貸して彼を立たせると回転する『魔力』の方へと視線を向ける。

「アレは、いつたい何なのじゃ・・・、何が起じてているのじゃ？」

シグルスはルミアに肩を貸して貰い、なんとか立ち上がつて少女の魂の方を見やる。

少女の『氣』は、既に完全に漆黒へと変化し、もはや『氣』の渦の中心にある少女の亡骸と魂は視認する事が出来ないほどに、濃い

色をしてくる。

「彼女の魂は、『狂氣』に完全に取り込まれてしまったようです。・
・
・
魂や神に属するものといった靈的な存在は『狂氣』に取り憑かれ
ると『輪廻転生の輪から外れた存在』となってしまうのです。・
・
・

ルミアは沈痛な面持ちで唇を噛み締めながら悔しそうに言葉を続
ける。

「『ああ』なつてしまつてはもつ、どうする事も出来ません。
シグルス様の刀で、死後の世界へ送り出してあげて下さい。・
・
・

ルミアの言葉を聞いたシグルスは絶句している。

「わしに・・・あの憐れな少女を斬り捨てる、というのか・・・
?」

シグルスは悲しみに満ちた目でルミアに問いかける。

「そうです。彼女の魂を狂氣から開放してあげる事こそが、彼女
の魂にとつて唯一の救いとなるのです」

ルミアは悲しみと苦しみに満ちた目でシグルスに答える。

「わしが斬つた「流れから外れた者」は地獄へと誘われるのであるう？あまりにも少女に救いがなさすぎるのではないか？少女を殺した男達は生かされ、仮に法によつて生命を奪われたとしても死後の世界で裁かれる事はないのである？なぜ少女の魂だけが地獄へ行かねばならんのだ・・・」

ルミアに肩を貸してもらい立つていたシグルスは、彼女から離ると憐れな少女の魂の方へと目を向ける。少女の周りを回転している『漆黒の氣』は禍々しい気配を放ちながら少女の亡骸と魂を包み込んでいるままだ。

「ですが、シグルス様が少女を斬らなければ、『狂氣』に飲まれた彼女の魂は多くの者の命を奪う事になります。そうなれば『狂氣』は『狂氣』を呼び、また新たな『輪廻転生の流れより外れた者』を誕生させてしまう事に成ってしまいます」

ルミアがそう語つた所で竜巻のような渦を巻いていた『漆黒の魔力』は突如、はじけた。

漆黒の気がはじけた事により、爆風が巻き起こり周囲の物を吹き飛ばしていく。

シグルスは痛む体で爆風に耐え、ルミアを庇つように爆風によつて飛来する物に背を向け、ルミアを抱きしめていた。

そうして爆風が收まり、シグルスとルミアが漆黒の氣があつた方へ視線を向けると、そこにはかつて少女であつた『魔物』が佇んでいた。

全身が鱗で覆われ、8本の腕と蛇の下半身を持つ魔物は、その鱗で覆われた顔に怒りと憎しみの表情が浮かばせ、強い殺氣を放っている。

『ガアアアアアアアアアアツ！』

魔物は咆哮をあげ、シグルスとルミアに向かつて攻撃を始めた。シグルスは先程から抱きしめていたルミアを抱え、後方へと跳躍し、魔物の攻撃をかわす。

ちなみにルミアの魔法を受けて氣絶させられていた野盗達は、先程の爆風で洞窟の奥のほうまで吹っ飛ばされていた為、魔物に狙われずにするなどである。

シグルスは抱えていたルミアの体を離すと、魔物の方へと向き直り村正を抜刀した。

「やるしか・・・、ないようじやの」

シグルスは村正を蜻蛉とんぼに構える。

彼は、少し前までは少女だった魔物を少しも苦しめる事なく絶命させる為に、この「一撃必殺」の示現流の構えを取つたのであつた。

シグルスの精神は研ぎ澄まされ、先刻野盗達に向けていた『狂氣』とは異なる白い清浄な光が漂う『氣』を身体に纏わせている。

そんなシグルスを見つめていたルミアは彼に「少女の魂を解き放つてあげて下さい」と声を掛けると、後方へと下がり、彼を見守っていた。

10話 朝の光（前書き）

いつも私の作品を読んで下さっている皆様有難う御座います。
拙い私の作品ですがこれからも宜しくお願い致します。

10話 朝の光

シグルスは蜻蛉の構えで魔物と向き合っている。

シグルスは深く呼吸をし、呼吸によつて自身の中を駆け巡る『氣』
、すなわち『魔力』を臍下丹田と呼ばれる場所へと集中させている。

『グルアアアアアアアアアアアアアツー！』

シグルスと対峙していた全身を鱗で覆われた魔物は、本能の赴く
ままに彼を殺そうと雄たけびを上げ、八本の腕でシグルスへと殴り
かかる。

シグルスに襲い掛かる八本の手。その腕を振るう速度は風のよう
に速く、当たれば只では済まない事は一目瞭然であった。

シグルスは襲い掛かる魔物の手を見つめたまま一度深く呼吸する
と、丹田に込めていた『氣』^{魔力}を爆発させた。

「キエエエエイー！」

シグルスは示現流特有の掛け声と共に『氣』^{魔力}を爆発させ、蜻蛉に
構えていた村正を稻妻のような速度で大きく振り下ろす。

シグルスに殴りかかっていた魔物の手はシグルスに当たる寸前で
止まり、その怒りに満ちた表情は虚空を見つめている。

『ガ、ガアアアアア、ボ、ガアザン・・・

少女であつた魔物は最後に母の事を呼び、その鱗に覆われていた身体は縦に真つ二つに裂け、絶命したのだ。

「ツク！」

「大丈夫ですかシグ尔斯様ツ！！」

シグ尔斯は両の膝をついて、苦痛に満ちた表情で上半身を刀で支えている。傷んだ身体で刀を振るつた反動が彼を襲つたのだろう。ルミアは慌てて彼に駆け寄る。

シグ尔斯はルミアに支え起されると、少女であつた魔物の亡骸の方を見やる。ルミアもじつと、少し前までは少女であつた魔物の亡骸の方へと視線を向けていた。死後の世界の女王の話では、最後にもう一つしなければならない事があつた筈だからだ。

魔物の身体から、黒い球体のような魂が浮かび上がり、それを確認したルミアはシグ尔斯に声を掛ける。

「これで、終わりです・・・、少女の魂を救つてあげて下さい」

ルミアに声を掛けられたシグ尔斯は「うむ」と短く答え、手に持つていた村正で黒い球体のような魂に村正を振るつた。

黒い球体のようになってしまった少女の魂はシグ尔斯に村正で切られると、白い光に包まれ、洞窟の天井を突き抜け、天高く舞い上がりついたのだ。

「少女の魂が、地獄で罪を償い終え、いつの日か天の国で両親と再会出来る事を願おう」

シグ尔斯は沈痛な面持ちで少女に祈りを捧げる。

「地獄の王『ウェンム』様は慈悲深いお方と聞きます。きっと少女も多少の罪は受けても、その罪は大きく酌量される事でしょう」

ルミアがそう答えるのを見て、シグ尔斯は「そうか……」と咳くと、ルミアの良く知る優しい表情へと戻つていった。

「長かった夜も明けたようじゃの……」

シグ尔斯達が現在いる洞窟の入り口からは、朝の光が差し込んできている。

シグ尔斯を支える為にシグ尔斯に寄り添っていたルミアは目を細めて差し込んでいる光の方へ視線を向け、小さく頷いた。

そうして彼等の転生一日田の長い夜は明けたのだった。

10話 朝の光（後書き）

ようやく「転生一日田の夜が終りました。

またまた、本文を大量にいじくつたりしちゃってます。申し訳ありません。

1-1話 町へ（前書き）

アドバイスを下さった銀丈様、雨虎様、本当に有難う御座いました。自分では気づく事の出来なかつた事などがわかり感謝しております。

11話 町へ

シグルスとルミアは過去に少女であつた魔物を洞窟の外の少し開けた所へと埋葬し祈りを捧げると、洞窟内にあつた手ごろな縄でまだ氣絶していた野盗達を縛り洞窟を後にした。

ちなみにシグルスに殴られて洞窟の入り口で氣絶していた男や、シグルス達が焚き木をしていた所で氣絶していた男達は洞窟から出したシグルスが、ついでにと付近の木に縛り付けたようだ。

洞窟を後にしたシグルス達は、付近の人里を探してルルの森の中を歩いている。

先程シグルスがルミアに聞いた話では、現在位置から一番近くの町は森を南に出て、約20kmほど歩いた位置にあるらしい。合計25km程の行程なのだが、現在、満身創痍のシグルスと和服のルミアには辛い道のりとなる。

シグルス達二人はやつとの思いで森の中から抜け出すと街道へと出た。街道は日本のようなアスファルトで整備された道ではなく、人や馬車の車輪などによつて踏み固められただけの砂利道となつている。

周囲には建物もなく、後方にルルの森があるだけで、他には何もない。ただ広い草原が地平線まで続いているだけだ。

「やれやれ、野盗達の姿とアジトを見て薄々感ずいてはいたが、やはりこの世界の文明『れべる』は低いようだの」

シグルスは、疲れた表情で深いため息をつきながらルニアに問いかける。

「そうですね、この世界はシグルス様がいた世界の中世纪一ロッパくらいの文明レベルですね。」

まあ魔法があるから、文明がなくとも不自由はしない世界ですかね」

「今、まさに不自由じとる気もするがの・・・」

「それは言わない約束ですよ・・・」

シグルス達は体の疲れを誤魔化すかのように他愛のない話をしながら、地平線の端まである街道を歩いている。その途中、「あつー」と声を上げたルニアが転げそうになり、シグルスはとっさに抱きとめる。

「あ、ありがと!」やれこめや

「ふむ、ポックリの鼻緒が切れてしまったようだの」

「ほれ、鼻緒を直すから、ここに足を乗せよ」

そう言つてシグルスは片膝を立てて座り、ルミアに立てた膝に足を乗せるように促す。

「い、いえ、そんな・・・」

「そのままでは、歩く事は出来んじゃろ？ ほれ、早う乗せんか」

断りうとしていたルミアだが、シグルスの言つ通りこのままでは歩く事が出来ないので渋々と了承したのだつた。

少し照れくさい状況に顔を赤くしているルミアと、うつむいてポツクリの鼻緒を直すシグルス。

二人の間には小さな沈黙が訪れている。

「ほれ、直つたぞ」

「あ、ありがと」

少し照れたような笑みを浮かベルミアはシグルスにお礼を言つと、再び歩き出した。

一人が暫く歩いていると、やがて目指している町の城壁が見え始め、二人は町が見えてきた事で体の疲れなども忘れて喜んでいる。

そうして、町まで後30m程の所まで来たといひでルニアはハッ
とし、懐を探つている。

何やら切羽詰つた様子のルニアを不審に思ったシグ尔斯はルニア
「どうしたのかと問いただす。

「シ、シグ尔斯様、私達お金持つてませんよね・・・? ビビビ、
どうやつて町に入りましょ?」

「うふ? 町に入るのには金がいるのかの? 金とはコレの事かの
?」

そう言つてシグ尔斯は懐から手の平ほどの大さきの布の袋を取り
出し、中に入っていた胴色や銀色の硬貨らしきものをジャラジャラ
と取り出す。

「……は?

ええええええええ! ? 何でお金持つてるんですか? どう
してですか! ? 私達昨日この世界に来たばかりですよ?」

「うむ、先立つモノは金と昔から言つじやろ? わしが最後に縛り
上げた野盗の下つ端の懐から拝借しておいたのじや。まあ後ろ暗い
金である事は間違いないじやろうが、わしと婆さんは戦後に金も物
もなかつたせいで随分と苦労したからの。金の大事さは身に染みて
おるのじやよ。まあ悪いかなとは思つたがのつ」

「抜け目ないですねえ……」

シグルスの抜け目ない行動に少し呆れた様子のルミア。シグルスは呆れ顔のルミアに話を続ける。

「ふおふおふお、年の功といつやつじや。さてわしはこの世界の金銭の価値がわからぬ、説明してくれるかの」

ルミアは頷くとシグルスの問い合わせに対し説明をはじめた。若干、これではシグルスの方が野盗のようだなとか思っていたのだが、それは口に出さない事にしたようだ。

「わかりました、現在シグルス様がお持ちになつている硬貨は銅貨と銀貨になりますね。

現在手元にはありませんが、後は金貨という物もあります。大体銅貨50枚程で銀貨一枚となり銀貨は20枚で金貨一枚となります。シグルス様の故郷の通過で価値を表すとすると、金貨一枚は大体10万円くらいといった所だと思います。」

「なるほどのう、じゃあ現在は2万円程の金があるという事か。して、町へ入る為の金とやらには足りるのかの？」

そういうて彼は持つていた硬貨を見やる。この世界の金銭の価値

をおおよそ把握した様子のシグルスは野盗から拝借した硬貨を数えながら、町に入るための金額に足りるか気にしているようだ。

「ええ、大丈夫です。外部の者がこの町へ入る為の手続きに必要になるお金は銅貨5枚ですから。シグルス様はこちらの世界の文字は書けないでしようから私が変わりに手続きを行いますね。名前などを書かねばなりませんので」

ルミアがシグルスにそう伝えるとシグルスは安心した様子だ。二人は話を終ると町へと近づいていった。町は周囲を石造りの城壁で囲まれていて、シグルス達の目の前には大きな門があり、西洋鎧に似た鎧をまとっている者達が2人で警備している。

ルミアは手続きの為シグルスから銅貨5枚を受け取ると、警備をしていたもの達の方へと行き簡単な手続きを済ませているようだ。

手続きを終えた二人は町の中に入ろうと町の門をくぐる。シグルスは始めての異世界の町に胸を高鳴らせながら町へと入っていった。

1-1話 町へ（後書き）

未だに文章力が向上せず、何やら不自然な表現など繰り返している私ですが今後も日々、研鑽を重ねて少しでも皆様方に楽しんで頂ける作品をかけばなあと妄想しております。

まだまだ未熟な私ですが、時間をかけて修正など繰り返しながら一つの『作品』を描きたいと考えておりますので、今後とも生暖かい目で見守って下さいましたら非常に嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145z/>

翁な青年の異世界冒険記

2011年12月26日21時15分発行